



一・発端

「始まり」につながる七日間

一九七〇年八月二三日。佐渡島の両津港に、三〇人余りの若者が降り立った。「佐渡島の民俗芸能を見て回り、歴史、文化を学びながら、地方文化の良さを見直してみよう」という企画に参加する若者達だ。

二九日まで、民宿に泊まりながら鬼太鼓や佐渡おけさなどの佐渡の芸能を見学し、相川の金山巡りや小木のたらい舟に乗って、佐渡の土地柄に触れた。初対面だった若者達は同年代の気安さで、次第に打ち解け、まるで修学旅行のように賑やかに過ごした。

最終日、それまで案内役のように振る舞っていた田耕（でん・たがやす 三八歳）が参加者の前に立った。

「佐渡に日本の民俗芸能や工芸を学ぶ職人村と、日本海からの視点を見直す日本海大学を作る。その実現のために太鼓を持って世界を回り、思いを訴えつつ資金作りをする『おんでこ座』を作る。ぜひ参加してほしい！」

高度経済成長期の大量生産・大量消費が定着しつつあった時代。大学紛争の嵐は峠を越えたものの、まだくすぶっていた。自分たちの大学を自分たちの手で作る夢に賭けてみないかという田の熱い口ぶりは、若者達に魅力的に響いた。

そしてこの七日間が、若者達の人生を大きく変えた。

※この章に登場する田耕氏ならびに、在籍当時の鬼太鼓座座員、鼓童メンバーは、敬称を略させていただきます。

※この章の登場人物は当時の年齢を表記。

〔1〕佐渡の芸能／鬼太鼓は鬼の面や装束をつけ、太鼓に合わせて一人または二人で舞う。佐渡おけさは佐渡を代表する民謡。

〔2〕金山／一六〇一年の発見以来、三七八年間採掘が続けられた。

〔3〕たらい舟／直径約一五〇cm、高さ五〇cmほどのたらい状の舟。ハンギリとも呼ばれる。現在も観光用の他、磯での見突き漁、海藻採取などで使われている。

佐渡の郷土芸能「つぶろし」を見学する参加者達。

